

NPO法人 臨床応用科学  
Clinical and Applied Science

# Vascular Street

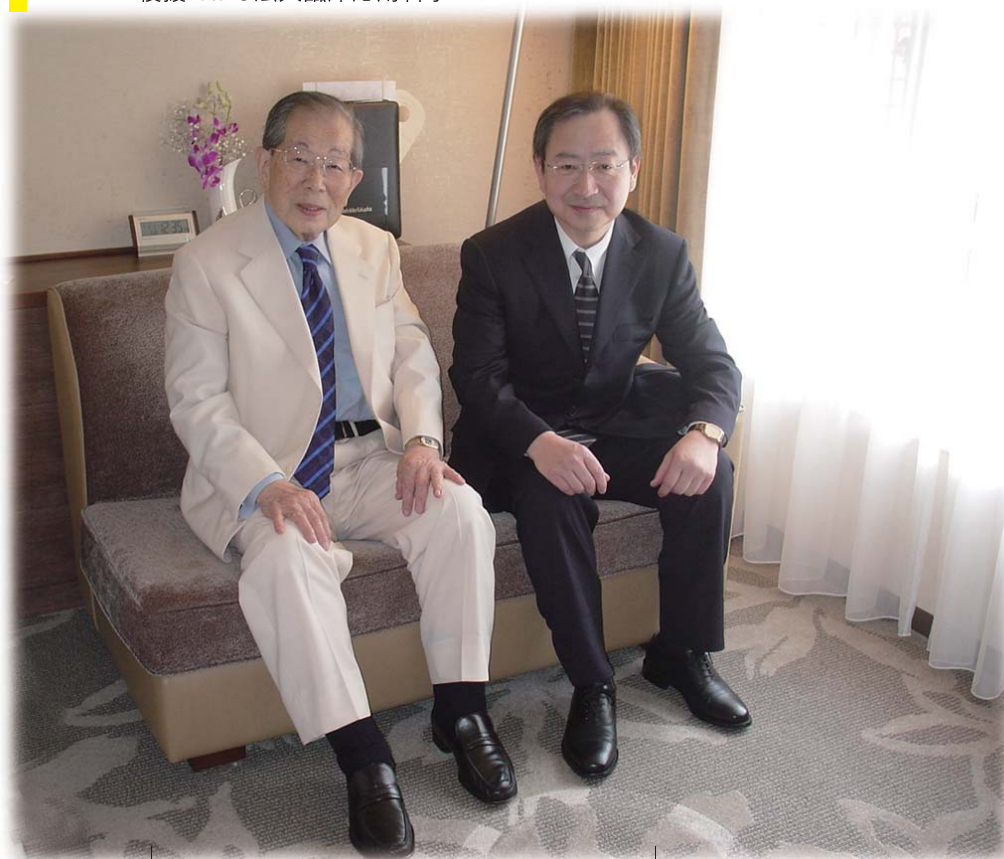
福岡大学創立75周年事業

福岡大学医学部・病院 創立35周年記念事業・市民公開講座

## 「命の大切さを考える」

～医学と医療と社会への貢献をめざして～

特集

主催：福岡大学医学部、福岡大学病院、福岡大学医学部同窓会烏帽子会  
後援：NPO法人臨床応用科学

聖路加国際病院  
理事長  
日野原 重明 先生

福岡大学 心臓・血管内科学  
教授  
朔 啓二郎 先生

### はじめに

福岡大学創立 75 周年事業の一環で、福岡大学医学部・病院創立 35 周年記念事業の企画・運営を当時の医学部長、病院長から依頼されたのが約 1 年半前、副病院長をしていた頃である。市民公開講座を主体に楽しい企画を考えてみた。多くの福岡市民の皆様に参加してもらいたい。要請を受けた瞬間から答えは決まっていた。日野原先生しかいない。私は米国内科専門医会 (ACP) の日本支部の理事をしているが、この二年間、毎年 ACP Japan Chapter の総会後のパーティーで乾杯の挨拶をしていただいているのが日野原先生である。日本のお医者様の中で、一番有名な方とご紹介しても過言ではない。先生は京都帝国大学ご卒業後、アメリカにご留学、現在の日本の内科学の基礎を作られた。「生き方上手」、「いま伝えたい大切なこと」等々、多くの本も常にベストセラー、2005 年に文化勲章、今なお精力的に様々な活動をされておられる。3 年後まで講演のスケジュールがつまってる先生に、無理にお願いし来福していただいた。福岡市中央区の天神エルガーホールに、1200 名の市民の皆様が集まった。この数年では、最大規模のイベントだった。



## 「命の大切さを考える」

**朔** 先生の詩にこのようなものがあります。「愛を感じられる人、その人は人を愛せる人、人を愛せる人、その人はいのちを感じられる人」。私はこの一節を今回の公開講座のテーマにしました。この文章を読みながら、先生にステージにご登壇していただきました。いのちを考えるとそれは重すぎて、奥が深くて、広すぎる、考えるチャンスすら忙しい現代人にはないようです。先生にいのちの授業をしていただきたく、医学部・病院の35周年行事のテーマとして最高だったと思います。

**日野原** いのちはね、かけがいのないものなんだね。僕は90歳をすぎたから、いのちは自分が自分の意図で活用できる時間だと思うようになったのね。いのちに感謝して自分らしさを吹き込むの。だから僕はいのちに自分らしさを注ぎ込み、良い時間を持つように心がけ96年を生きてきましたよ。子供にいのちの授業をしているけど、いのちは君たちが自由に自分らしく使える時間だよと教えているんです。いのちは定められたものではなく、自分で決められますね。当然、細胞は老化していくのですが、新生もしますね。いつも必要な細胞が補われれば生存は補償されます。このことは私たちの社会でも一緒ですね。他人や外国の援助があって初めて健全な社会を生きられます。一人では何も出来ないね。

**朔** 先生、ただ、生きればいいのかではありませんよね。生き甲斐や喜び、これをどういのちの中に吹き込みをしていけばいいのでしょうか？



**日野原** それはね、命がどんな過去によって位置づけられているのか考えるのも重要ですね。過去への反省、そして充足、現在の命、そして未来の命にバトンタッチされる、これが幸福感のあり方につながってきます。僕が「時」や「時間」に注目し、それを生き甲斐にむすびつけた理由がわかってくるかもしれないね。これまでをしっかりと振り返り、生きてきた道とこれからの道を考えることが必要だ。いのちの過去、現在、未来を考えると必ず開けるものがあるよ。

**朔** もう一度自分の時間の使い方を反省すべきですね。人の気持ちは変えられないけど、自分は変えられます。過去は消せないけど、未来は変えられる。先生のお話を聞いて元気が出てくるのはそのような心の勇気が形にはみえないけど感じられるんですね。先生のご講演の中に小学生が漢字を習う、漢字には多くの「心」があるんですね。心が否定されたら悲しい字になるし、愛の中に心があるんですね。日本の文字には哲学がある。字からいのちを教わってるんですね。はじめてでした。私は先生の著書を読むと一貫した先生の思いにふれます。大学受験を失敗した人でなくてはその気持ちはわからない、病気になった人でないとその心配はわからないことです。だから、人の反応、感性、経験は重要ですね。







## 「人生の最後は質の高い生き方をしなければね」

**日野原** 人間の生に関して、医療従事者は強く関わっていますね。私たちはいのちの誕生に興味をもち青春を迎え老年期に病気になって治療する。このような事柄には大変興味があるんだけど、日本の医学は終末の医療をいまで軽視してきたと感じます。人は死を約束された生き物です。これは変わらない法則なんだな。ターミナル医療というけど、外国ではターミナルは出発点だよ。医療は生命をのばすことだけを考えるのではなく、死に向かって成長することが重要ね。

老いることは程度の差はあるけど誰にでも訪れる。だから、人生の最後は質の高い生き方をしなければ。患者さんも医療者も有終の美を追求しないといけないね。医学の目標は予防、治療、延命、それといのちの質（クオリティー・オブ・ライフ）が大切なのね。このクオリティー・オブ・ライフは、予防、治療、延命の全てのステップで重要なことなんだ。みんなで一緒に考えることだと思うよ。

**朔** シュバイツァー博士に学生時代から感動されたことを今回の講演会でもお話いただきました。博士は核兵器廃絶にも努力されました。生命への畏敬を展開された方ですね。今日は医学部の学生さんもたくさん来てましたので、彼らにメッセージをお願いします。

**日野原** シュバイツァー博士はこんな言葉を残しています。「生涯を通じて勉強し続けないと本当に立派な医師にはなりえない。そういう職業はほかにはない。だから感謝して生涯の学習に励みなさい」。僕は高校生の時に会った言葉だけど、70年以上たった今もこのことを



大切にしているよ。医学に卒業はないよ。患者さんを診ることで鍛えられていくわけだから、学び続けることは死ぬまでしていかなないとね。医学はね、科学に支えられたアートなんだ。アートはね、人へのタッチの仕方なんです。ヒューマンタッチが必要、病む人に如何にタッチするか、科学だけじゃなく医学でないと、患者さんにいつも手をあててね、医学生へのメッセージだよ。



## 「老という言葉、尊敬すべきことば」

**朔** 先生は新老人の会を設立されています。新老人の定義は 75 歳以上のエルダリーが対象となっていますが、老人の「老」は尊敬を込めた言葉と聞いております。この会のミッションについて伺いしたく存じます。

**日野原** 後期高齢者として一括した切り捨ては良くないよ。90 歳を超えた私自身も含めて元気な老人が沢山います。その根幹となるのは戦争を現実に体験した私たちが、未来の子供達に伝えることがある、平和と良き伝統を自らの言葉と行動で示したいのです。三つのスローガンがあります。

1. 愛すること (To Love)、
  2. はじめること (To Commence)、
  3. 耐えること (To Endure) とともに、
- 一つの使命「子供たちにいのちと平和の大切さを伝えること」なんです。



僕はね、「愛」ほど深く広い意味を持つ言葉はないと思ってます。その対象はいのち（生）あるもの全てに及ぶのね。そして、愛することは自分の気持ちを現すことだけではなく、その裏にはゆるすこと、相手のためには自分を犠牲にしてもいいわなという思いが含まれているんだね。

**朔** 先生はミュージカル「葉っぱのフレディ」の脚色もそして出演もされてます。もともと、子供にいのちについて教えるための絵本でしたが、人間の生き方、死に方がベースにあるのですね。

**日野原** この原作は「生きる」ということは、死に向かってどう自分を変えていくべきかということ、それを問うものです。四季の葉っぱの形や色の移り変わりから、人間はどうよく生きていくかが問われるストーリーです。全ての生きものには死がある、これを考えれば、強くなれる。この作品に関わることによって、僕は子どもたちにいのちの大切さをアピールしたいのね。僕のミッションだと感じてます。



**朔** 日野原先生、今日は1200名の福岡市民の方が、体操や先生のお話で一体しました。大変良かったと思います。いのちのメッセージ通して一体感が生まれた、これが世界平和につながるんですね。先生はよど号ハイジャックの時から、福岡にご縁があたりですね。美しい世界のために、全てのいのちのために、先生の益々のご活躍とご健康をお祈りいたします。本日は大変ありがとうございました。